

第4章 プロジェクトサイトの現状と妥当性

4 - 1 プロジェクトサイト

プロジェクトサイトは、モデル炭鉱として坑内モニタリング・モデルシステムを設置するなど、主な現場実務教育活動の拠点として、マオケー炭鉱がヴィエトナム側から提案された。

また、炭鉱ガス安全管理センターの候補地として、ヴィエトナム石炭総会社の所有するウォンピ市内の鉱山学校、及びウォンピ石炭会社宿泊施設内食堂の建物がヴィエトナム側より提案され、これらについて現地を訪問し調査を行った。図4 - 1 - 1にプロジェクトサイトの位置関係を示す地図を示す。



図4 - 1 - 1 プロジェクトサイト位置関係図

(1) 施設

モデル炭鉱としてのマオケー炭鉱については現地調査の結果、既に述べたようにプロジェクトサイトにふさわしい施設を有していると判断された。

炭鉱ガス安全管理センター候補地としてヴィエトナム側から提案されたウォンピ市内の鉱山学校に関しては学校の建物として設計されているため、講堂などの大型の建物と数多くの小さな部屋で構成されており、研修等には便利な施設と推察された。しかし、多くの部屋は幅

2.6m、奥行き（建物そのものの幅）が6 m程度しかなく、炭鉱ガス安全管理センターの施設として使用するには相当な改造工事が必要であること、また改造しても各室の配置が縦に一直線に並ぶことになり、研究施設として使い勝手の悪さが予想された。

もう一方の候補地である、ウォンピ石炭会社宿泊施設内の食堂の建物2階部分については、廊下を中心に大小の部屋が配置されており、広さも適当である。また、食堂の裏手にある別棟は広い前庭を有し、車両による重量物の搬入も容易であるなど耐圧防爆検定にふさわしい立地となっていることが判明した。したがってこれらの調査結果から、ウォンピ石炭会社宿泊施設内の食堂の建物がプロジェクトサイトに最適と判断された。図4-1-2にウォンピ石炭会社宿泊施設内の建物レイアウト図を示す。施設内食堂の2階部分が炭鉱ガス安全管理センターの候補地である。また、食堂別棟となるポンプ室等の入った建物は、車でのアクセスが良いことや広い前庭を有することなどから、重量物の取り扱いとなる耐圧防爆検定用施設として適当であると判断し、施設の一部として使用することとした。

図4-1-3に食堂2階部分のレイアウト及び機器の設置案を示す。

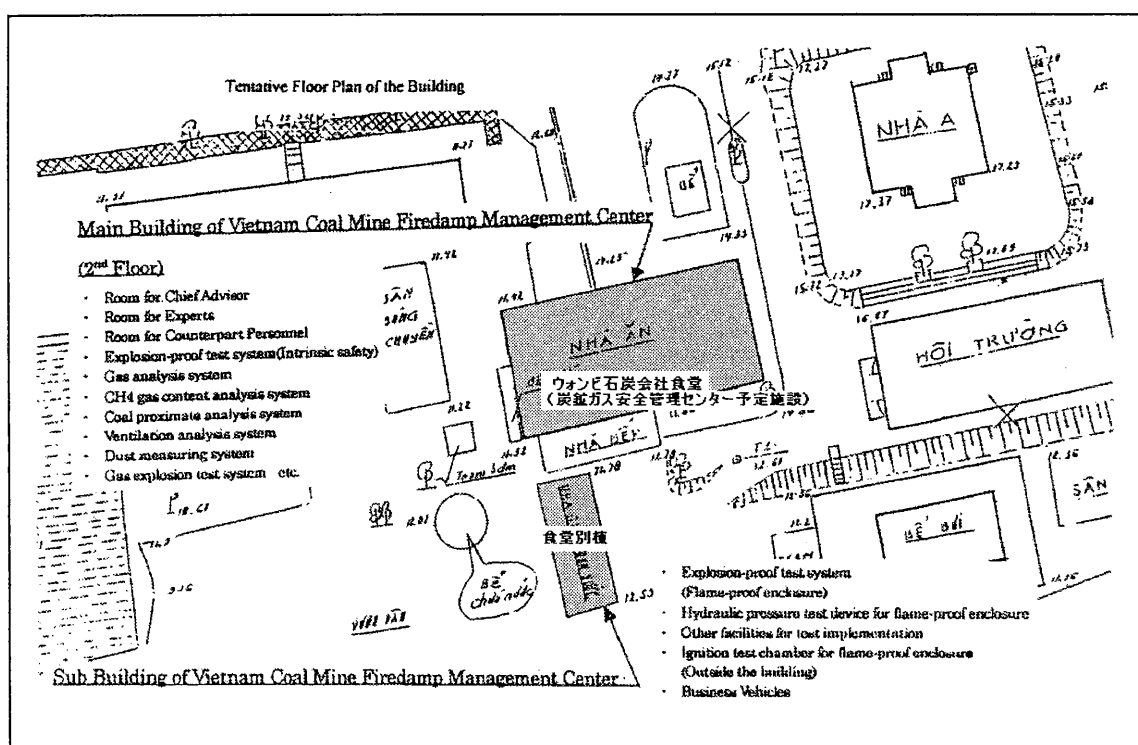


図4-1-2 ウォンピ石炭会社宿泊施設内建物レイアウト図

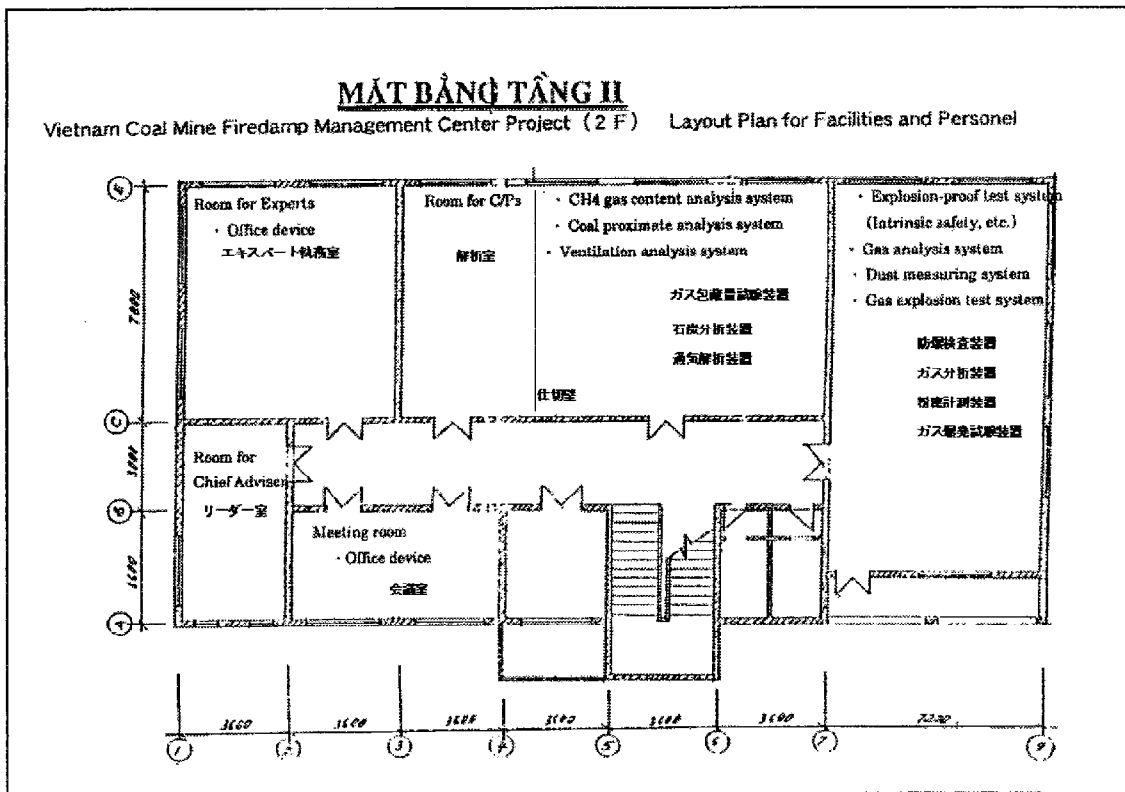
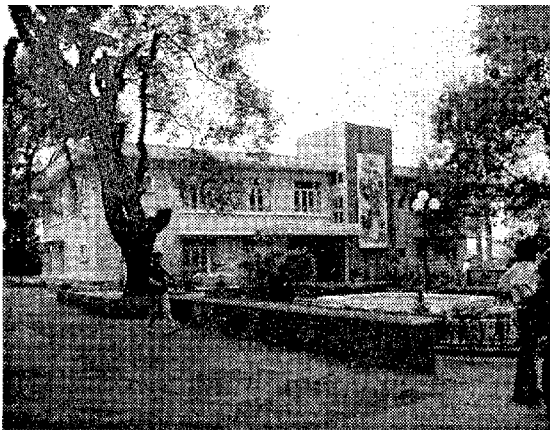
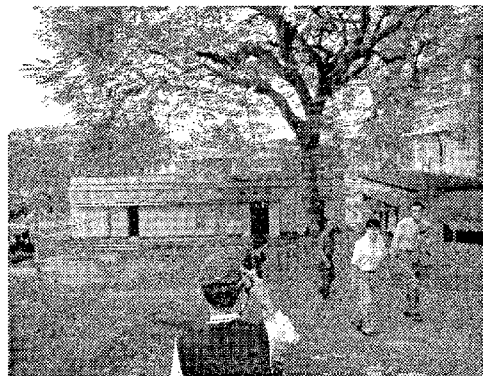


図 4-1-3 食堂 2 階部レイアウト及び機器設置案



食堂外観



食堂別棟

(2) インフラ

首都ハノイからプロジェクトサイトとなるウォンビ迄の道路はすべて舗装され、また一部は高速道路となっているため、車を利用すると約2時間で現地に至る。したがって、ハノイへの日帰り出張も可能な距離にある。図3-4-1及び図4-1-1参照。

現地までは鉄道も利用可能であるが、便数が限られ時間も掛かることから、移動手段としてはあまり利用されていない。

また、モデル炭鉱となるマオケー炭鉱からウォンビ市内の炭鉱ガス安全管理センター候補地までの距離は約20kmで、車を使用すると30分で移動可能な距離にある。

さらに、炭鉱ガス安全管理センターから長期専門家の居住候補地バイチャイ市内までは約40kmあり、車で約1時間程度の距離であるが、日常業務に支障のない範囲で通勤可能である。現在この区間の道路整備が進行中であり、完成すると更に移動時間が短縮されるものと期待される。

(3) 妥当性

マオケー炭鉱は将来に渡ってVINACOALの拠点炭鉱であること、ヴェトナムにおける代表的な坑内掘炭鉱であり管理体制もしっかりしている。また、今後の深部化・奥部化の進行によって坑内の安全確保がますます重要な課題となることから、モデル炭鉱として妥当であると判断される。

炭鉱ガス安全管理センター候補地に関してはウォンビ石炭会社宿泊施設内の食堂2階部分をガス分析等の研究室並びに事務室として使用し、食堂裏の別棟とその前庭を耐圧防爆検定に使用することで決定した。この建物の2階部分は十分な広さを有しており、また別棟は広い前庭を有し、車両による重量物の搬入も容易であるなど耐圧防爆検定にふさわしい立地となっており、プロジェクトサイトに最適であると判断された。現状の建物に空調設備や電話が設置されていないなど、改造工事が必要となるが比較的容易に実施可能であると判断される。

4 - 2 専門家住環境

(1) 住居

プロジェクトサイトとして、マオケー炭鉱及びウォンビ石炭会社宿泊施設内の食堂の建家を利用しての炭鉱ガス安全管理センター設置が妥当であると判断されたため、長期専門家の宿泊施設について、通勤可能範囲において調査を行った。

長期専門家の居住施設としては、ウォンビ市内の炭鉱ガス安全管理センター候補地となったウォンビ石炭会社宿泊施設、及びウォンビ市内から東へ30kmほど離れた国際観光都市バイ

チャイ市内のホテルがヴィエトナム側から提案された。

しかし、ウォンピ石炭会社の宿泊施設は旧ソ連時代に設計された古い建物であるため各部屋が狭く、建物自体にも奥行きがないため長期滞在用への改造は困難であると判断された。

一方、バイチャイ市内のホテルは国際ホテルであり、設備やサービス面において、長期滞在には十分耐えられることが判明した。しかし、滞在者が自由に使用できるキッチン設備はないため、キッチン設備の可能を含め検討する事となった。



サイゴンハロンホテル敷地内の様子

候補 : サイゴンハロンホテル

庭を中心に5棟の建物があり、各棟にはそれぞれ3～6室のツインルームがあり、1階部分には共用の食堂があり、ロビー兼談話室として使用可能。また、3室のタイプは全室借り上げれば、家族の同居も可能である。

建物内には台所の設備はなく、長期滞在の場合部屋の改造が必要。



サイゴンハロンホテル内のビラと呼ばれる独立した建物（3部屋タイプ）

候補 : ハロンプラザ

レストランやプールを備えた大型国際ホテルで、スイートルームは広く見晴らしも良い。長期滞在には申し分ないが、こちらもキッチン付きはないので部屋の改造が必要となる。

現地の物価事情からすると新規に建物の建設も考えられるが、建設に要する期間は1年以上となるため本プロジェクトには適合しない。したがって、上記候補の中からキッチン設備や価格の交渉を通じて条件の適合するホテルを選定することとなる。

(2) 食料

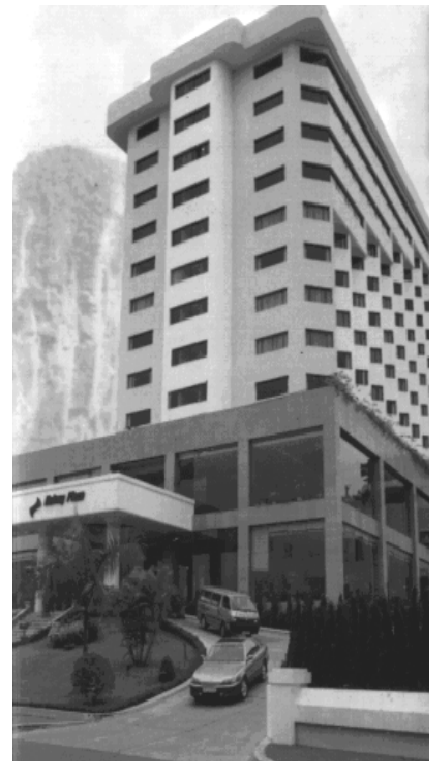
穀物、肉、野菜はもちろん、新鮮な魚介類も入手可能であるため問題はない。

(3) 医療

4月から日本人医師がバイチャイ市内に駐在するとの情報があるが、軽微な疾病治療もしくは救急医療のみの対応と考えられる。したがって、重病(症)患者が発生した場合にはハノイ市内への移送が必要となろう。ハノイ市内には国際病院も完備しており十分な治療を受けることができる。

(4) 通信

ホテルから国際通話が可能。携帯電話も使用可能である。一般情報源として衛星テレビが普及している。



ハロンプラザホテル